The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学校という記憶の場 ： 植民地台湾の時代からの連続性に注目して
Author(s)	林, 初梅
Citation	言語文化研究. 2013, 39, p. 149-174
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

学校という記憶の場

植民地台湾の時代からの連続性に注目して*

台灣百年老校所刻印的歷史集體記憶

校史的建構、展示與殖民遺緒的表象

林　　初　梅（LIN CHU-MEI）

提要：台灣有不少學校創設於殖民地時代，本文透過這些學校校史室及校慶活動的分析，探討台灣社會殖民地記憶受容的問題。各校校史室、校慶活動可以視為集體記憶表象的場域，筆者特別著眼於殖民時期與戰後之間連續性的問題，並分析1990年代以後殖民地記憶仍持續不斷被喚起的原因。最後，歸納出以下結論：（1）現今台北市內創設於殖民地時期的學校共有60所。（2）其中，大多數的學校舉行校慶活動，將歷史追溯到戰前，並視殖民地時期的「過去」及「遺跡」為自身固有的文化，殖民地記憶因此得以再現。（3）日台雙方共同參與的同學會，是促使殖民地記憶持續或重現的重要因素之一。（4）深植於學校此一場域的殖民地記憶，其推手並不限於戰前世代，由於戰後世代的積極參與，產生世代交替的現象，因而轉化為一跨越世代的集體記憶。

キーワード：台湾，日本統治時代，学校，集合的記憶，歴史

Key words：Taiwan , Japanese colonial period , schools , collective memory , history

はじめに

現代世界で広範囲にわたり過去と記憶に関心がもたれ，「記憶ブーム」といわれるほど，記憶への関心の高まりが起きている[1)]。その現象が発生した原因は，様々な角度から探られているが，本稿では，アイデンティティの危機に見舞われることによって過去への探求が強まると捉える[2)] 立場に立つことにしたい。

台湾でも1990年代から「記憶ブーム」が起きている。過去の出来事や偉人を語る公的行事が行われ，学問的著作が数多く出版されているのである。中でも目を惹くのは，植民地時代をめぐるものである。記憶がほかの国と同様，文学作品，教科書の描写，記念行事，展示会などを通して喚起されており，過去への言及はより幅広いグローバルな傾向の一部として見なすことができるものの，台湾の記憶ブームには植民地時代の過去を積極的に継承する独特の語りや表

*調査にあたっては，国立台湾師範大学・国立台北教育大学附設実験国民小学・台北市立建国高級中学・台北市立成功高級中学・台北市立士林国民小学・台北市立建成国民中学を訪問し，校史室担当の方に大変お世話になった。ここで感謝の意を表したい。

彰があると思われるからである。

筆者が植民地時代の記憶のありように注目する理由を述べよう。それは植民地宗主国日本に対する評価が戦後60年の間に逆転するほど著しく変化したことにある。戦後の台湾は，当初脱日本化が喫緊の課題だとされていた。しかし，今日，例えば，多くの学校は自らの歴史を植民地時代までに遡り，「百十周年校慶」「百周年校慶」「九十周年校慶」などの記念行事を行い，さらに学校史の編纂，校史室の展示を通して植民地時代からの歴史・記憶を書き留めようとしている。植民地の記憶は長きにわたって「遺毒」として払拭すべきものだとされていたが，今は多くの台湾人に受容されている。人々にとって記憶の扱いはどのように変化したのだろうか。記憶は変わらずに，ただ表に現れるものが変わったのだろうか。それとも記憶の内容も変化したのだろうか。

本稿は，今日の台湾における記憶のありようを捉え，逆転するほどの変化とはどのようなことなのか，何がそれを促したのか，そして何がそれを支えているのかを探ることを課題とする。筆者は，それを考察するに当たって，植民地時代に設立された数々の学校をめぐる記憶を取り上げることとする。

すでに拙著『「郷土」としての台湾』（2009）で論じられたことだが，1990年代以降，台湾の郷土教育の教材や社会教科書は植民地統治に対する台湾人の武装抗日を強調しながらも，植民地時代における近代化の経験を明確に記述している。そして，そのような歴史観は，日本統治の経験が中国と異なる台湾社会の独自性を決定づける一要素であると捉え，新たなアイデンティティの形成を促す，国民形成としての機能を果たすと位置づけた[3)]。しかし本稿では，そのような歴史教育内容としての把握ではなく，「国」の「歴史」よりも，台湾の隅々に存在している小さい集団の「記憶」にもう少し入り込んで行きたいと考えている。国家には規模の小さい集団が数多くあって，それらの集団もそれぞれ特有の記憶を持ち，その変化はより直接にその成員の生活や思考に影響を及ぼすと考えられるからである。

ここで，記憶と歴史との違いについて，フランスの社会学者アルヴァックスの議論を踏まえながら考えておくことにしたい。アルヴァックスは著書『集合的記憶』の中で，次のように説明している。歴史は集合的記憶が消えかけるところから始まるのであり，歴史化するとは消滅しそうな記憶を救うため，筋の通った物語として書き留める行為である。記憶は「ありのままの記憶」として理解され，それは生きている集団によって担われ，たとえ想起と忘却を繰り返し，変容するとしても，過去の「再構成」である歴史と対比されるものである[4)]。

アルヴァックスはさらに人間の記憶がじつは集合的な性格のものである点を強調している。一見，個人的なものに思われがちな記憶が，実は他の人々とその記憶を共有することによって支えられている。個人の記憶が集まって出来上がったものが集合的記憶であるというよりも，むしろ個人の記憶そのものが，集合という過程によって出来上がる。集合的記憶は本質的に現在の光の中でなされる過去の再構築なのである[5)]。筆者の注目している植民地時代創設の学校

に関する記憶も，アルヴァックスの言うそのような過程をとおして形成されつつあるのではないかと考えられる。

歴史と記憶に関するそうした区別はフランスの歴史学者ノラにも受け継がれた。ノラは「記憶は，具体的なもの，すなわち空間，動作，図像，事物などのなかに根づく。歴史は，事物の時間的な連続や変化や関係などにしかこだわらない」と，両者の違いを指摘している。そして違いだけではなく，さらに「記憶の場」という概念を提示したのである[6)]。ここで重要なのは，それを台湾の植民地の記憶に敷衍すれば，存続させる要因を探るときに，記憶を存続させる場所が持つ力は無視してはならないということである。

場所の持つ力についてはヴェレッド・ヴィニツキ-セルーシの論文にも提起されている。同論文はさらに記念行為には，①主体者，②場所，③時間，という根本的な三要素があると捉え，場所を三要素の一つに挙げている[7)]。学校はまさにそれがよく当てはまる場である。すなわち，学校は，ある定まった日に記念行事を行う記念行為の主体者であり，植民地の記憶を想起させる場所でもあり，周年記念は時間なのである。そして台湾では学校という場の中には，記憶を集約する場として校史室が設けられており，それは，日本統治時代に設置された学校である場合，事実上，植民地の記憶を表現する場ともなっている。学校は，卒業した人，ゆかりのある人，また訪れる人にとって，植民地の記憶を保持させ続ける，非常に強烈な場として存在しているのである。そしてまた，校史室は，逆にそうした記憶をあらたに集約して表現する場所ともなっている。

筆者は，本稿で，台湾の植民地の記憶の具体例として，日本統治時代創設の台北の学校を巡る記憶の問題を取り上げる。台北市は今日の台湾の事実上の首都であり，また日本統治時代には総督府の置かれた地であった。台湾の中では最も人口が密集し，学校数が多く，初等，中等，高等教育のいずれの学校も，台湾全土の学校をリードするものであった。従って，台湾全土の学校の様子を代表することはできないにしても，台北市の学校には，台湾の学校の持つ植民地記憶に関する基本的な姿が現れていると考えてよいであろう。本稿では，台北市の学校をとおして，学校という場のもつ力，すなわち記念される出来事があった実際の場所がもつ力に注目し，その「記憶の場」を分析しようという試みである。

その点をあらかじめもう少し具体的に述べておこう。校史室や創立記念行事などは「集合的記憶を表象する場」である。台湾の戦後においては，植民地時代の「過去」は消し去られようとし，埋もれたものであった。1980年代になって言論の自由化が進行し始めるとともに，記憶が表出し始めた。ここではそれを「記憶化」と呼ぶことにするが，記憶化は校史室の充実化や創立記念行事の変質を引き起こした。そしてそれがさらなる記憶化を生み出している。筆者は，そのような過程で進行する植民地の記憶をめぐる動向を分析の対象とする。なお，校史室は，台湾の学校では原則として設けることになっているようで，多くの国公私立学校に設置されている。また，創立記念行事を行わない学校はないといってよい。従ってそれらは集合的に扱う

ことが可能で，検討の対象として相応しい。筆者は記憶の再生装置としての，そのような学校，殊に校史室や創立記念行事に着目する。

アルヴァックスやノラの思想[8]に即して言えば，学校の校舎，敷地の様子，校史室の展示，創立記念行事などが提示する視覚表象は，記憶の再生作業を促すものであり，再生は集合的枠組みによって行われる。集合的記憶は，過去の事象のうち，その記憶の中で，今なお再生可能なもののみ，つまり，その記憶を保っている集団の意識の中で生き残ることのできたもののみ保持される。学校という「記憶の場」が具えている視覚表象こそが，再生を促しているのである。

筆者は，日本統治に対する評価の大きな変化を，以上のような文脈で捉え，「記憶の場」の視覚表象とどのように連関しているかを探りたいと考えている。すなわち，植民地時代という「過去」が，今日の台湾で，そうした「記憶の場」で，どのように表象され，記憶されているのか。筆者が解明しようと試みるのは，歴史それ自体の復元ではなく，現在のなかにある過去，つまり植民地時代の記憶がどのように形成され，或いはどのように存続するか，ということにある。近年になって，台湾人の対日観は多様であると指摘されている[9]が，それにもかかわらず，学校の歴史にかかわる施設や行事には，植民地の記憶に対する受容態度に，ある程度の共通性が見られる。筆者はそうした「記憶の場」を検討することによって，台湾に広く存在する埋もれた記憶の，隠された側面の発見と探求に繋げたいと考えている。

なお，論ずるに当たって留意しておきたい点として，植民地時代の記憶がなぜ今にいたって鮮明になってきたのか，ということがある。1980年代までの台湾においては，植民地時代の学校史は忘却すべき対象であったにも関わらず，今日，その時代からの連続性が強調されている。そこには非連続から連続へという大きな開き（逆転）があり，そのことは注目に値する点である。そこで，本稿では「記憶の場」を探るにあたって，各学校における植民地時代の過去のありようが，今日につながるものとしてどのように表象されているかを明かにする。そしてそれとともに，非連続から連続への変化がどのような経緯をもって発生してきたか，そしてどのような要因がその持続を促しているのかを確認する。すなわち，アルヴァックスやノラの集合的記憶の捉え方の角度から「記憶の場」を分析するに当たって，非連続から連続へという大きな変化が台湾社会においていかなる意味を持っているか，という視角をも含めることとする。本稿が事例として取り上げる台北市は，学校数が多いばかりでなく，台湾全土の学校における歴史の連続・非連続の多くのパターンが表出しており，その意味からも台北市の範囲で検討することは適切であると思われる。

これまでの研究では，植民地時代の学校を，植民地時代で完結する形で取り扱うことが多く，戦後台湾への連続性の問題に注目する研究についてはあまり研究成果が見られない[10]。まして，植民地時代に設立された数多くの学校とその校史室を記憶の場として取り上げて記憶を誘発する要因を分析することは殆どなかったと思われる。従って，本稿は，日本統治の影響を色濃く残す現在の台湾を，日本統治時代との関連性から社会学的に捉えようとする新しい試みである。

本稿は次のように構成する。まず，1980年代までの植民地時代の「過去」「遺構」の捉え方を確認するとともに，学校創立記念行事において植民地時代の歴史が，論争の対象から記憶の対象へ転化したことを検討する。次に，校史室や記念碑や旧校舎などの展示の現状を分析することによって，植民地の記憶に対する台湾人自身の態度が近年変化しつつあることを明らかにする。最後に台湾人アイデンティティと関連する文化的志向が形成される際に，「記憶の場」によって強化された植民地の記憶が，どのような展開をしつつあるのかということも考えてみたい。

ここで「戦前」，「戦後」という用語について説明しておきたい。アジア各国で戦争終結の日が異なることは周知のことであり，また「戦前」は字義通りには戦争が始まる前を指すが，本稿では便宜的に1945年8月15日以前のことを「戦前」，1945年8月16日以降のことを「戦後」ということとする。そして「戦前世代」と「戦後世代」という場合は，それぞれ「植民地体験を持つ世代」と「植民地体験を持っていない世代」を指すこととする。なお，本論の中で取り上げる校史室関係者の肩書については，筆者訪問当時のものである。

第１節　1980年代までの植民地時代の「過去」「遺構」の捉え方

今日の台湾において植民地時代の学校をめぐる思い出はかなり鮮明に語られている。それは，20年前までの状況と比較すればある意味で特異な状態であろう。記憶が鮮明となってきたことを理解するために，まず1980年代以前の状況を確認することにしたい。

国民党政府が植民地支配や中国侵略などの反日教育の内容を台湾人に注入し，様々な側面から「日本」記憶を抹消しようとしたことは，すでに先行研究によって指摘されている[11)]。そうした日本色一掃運動の厳しい環境の中にあって，植民地時代の記憶を保ち続けたのが学校であった。そして言論の自由化とともに，植民地時代からの連続性が表出してきたのである。ここで学校，校史室という場を起点としてそのような変容を探っていこう。

１．植民地の記憶の抹消

さきに述べたように，戦後初期の台湾において，脱日本化そして中国化することは国民党政府にとっては急務であった。建造物に残る植民地時代の痕跡を除去する命令も，出版物における日本語使用禁止の通達も発せられ，様々な側面から日本色の払拭が目指されていた。例えば，明治町，乃木町，若松町，朝日町などの町名は，中国式の道路による住居表示（例えば，三民路，中華路，中山路，中正路）に変更され[12)]，そして，日本文化，日本語の書籍，雑誌[13)]も排除されていた。

台湾にあった「日本」が一転して「中国」に変貌した例は数えきれず，史跡に刻まれた日本の年号は到る所で削り取られた。周知のように，戦前芝山巌事件で遭難した六人の教師のため

に建てられた「六氏先生之墓」「学務官僚遭難之碑」の記念碑は終戦直後，国民党政府によりなぎ倒され，それに代えて芝山巌事件を説明する碑が新たに建てられた。新しい碑文には，六氏先生を殺害した人達は日本統治に反抗する「義民」であったと記されている。植民地時代の顕彰碑などが駆逐の対象となった一方，反日そして中国的シンボルの導入も頻繁に行われた。

では，本稿が注目する学校や校史室の場はどうであろうか。戦後の台湾の学校の多くは，植民地時代から継承された学校であるか否かを問わず，校史の編纂，校慶日，校史室の設置について国民党政府から以下のような指示を受けている。なお，ここでいう校慶日は，必ずしも日本時代の創立記念日に該当するものではなく，学校の存在そのものを祝うというような意味合いを持っている。

（1）1951年に省政府教育庁が公私立の各中等学校に対して，学校沿革，歴代校長及び発展の様子について資料を収集し，史実を編集するよう指示[14]。

（2）各学校の元来の校慶日を一律に廃除し，それと別に台湾光復節の10月25日を各学校の共同校慶日にするよう指示[15][16]。

（3）1971年に教育部が各学校に，即日（1月22日）から校史室を置き，学校創立及び誇りのある歴史に関する文献資料を随時収集・整理し，系統的に展示するよう指示[17]。

上記からは次の二点が確認される。一つは，校慶日については戦前の記憶を排除する傾向があったことである。もう一つは，1971年という時点で，すでに校史を編集し，校史室を設置するという動きがあったことである。但し，1971年と1973年に次のような通達もあった。

> 校史資料は光復以降のものを収集する。日拠時期の部分は簡略にするが，欠けたままにするべきではない[18]。〔筆者訳〕
>
> 本省の公私立学校の中には，校史室に日本人の校長や教職員の写真を記念に飾って，中国を侵略した史蹟を展示している学校がある。そのようなことは我らの民族精神を挫き，民族意識を消滅させ，教育本来の狙いに反すると各界から指摘されているため，それらを撤収すべきである。（略）光復以前に設立された学校は，すでに発布したことだが，一律に10月25日の光復記念日を以て共同校慶日にするようにし，（略）創立年数は1945年から数え，光復後〇〇周年のようにすべきである[19]。〔筆者訳〕

この2つの通達から，政府には，学校からも植民地の記憶を払拭し，校史の内容を統制しようとする意図があったことが見て取れる。そして校慶記念日を一律に10月25日の光復節にすることが再び強調され，日本人の校長や教職員の写真展示をやめさせることもはっきりと表明されていたのである。さらに1987年に「抗日史蹟を講演の主題にして児童生徒学生の民族意識を増進させる」[20]という通達があり，その内容は，政府の干渉が1980年代半ばごろまで続いていたことを示している。

植民地時代の記憶を忘却させるという政府の意図は郷土教材にも反映された。台北市郷土教材の『我愛台北　文物史蹟彙編』（1987）は，現在の台北市立第一女子高級中学を取り上げながら，植民地時代の台北州立台北第一高等女学校であったことには触れず，昔の孔子廟の所在地であったと紹介している[21)]。台湾で最も古い小学校である士林国民小学の編集した『士林郷土教材専輯』（1988）も同様である。同書に掲載された士林地区中小学校の一覧表には学校名，開校時期，戦後初任の校長，学校住所が載っているが，戦前のことや士林国民小学の前身である八芝蘭公学校については一切触れられていない[22)]。

以上は，1980年代までに見られた校史の編纂や校史室設置の動きが，政府による歴史観統制の手段であったことを示している。植民地の記憶は「遺毒」として取り扱われ，忘却すべき対象であったのである。

２．植民地の記憶を存続させる場

しかしにもかかわらず，台湾の学校は，植民地時代から存続しているものが多い。それらのほとんどは，国民党政府が植民地の記憶を抹消できなかった場の一つとなっている。

2010年の時点では，台北市内に，公立小学校は全部で153校（国立2校･市立141校･私立10校。補校，設立予定の学校を除く）[23)]ある。筆者は2009年12月頃に153校の小学校に調査票を郵送し，予備調査を行った。戦前と戦後とのつながりを確認するためのもので，アンケートの質問項目は①学校の歴史は何年か？②学校は何年何月何日に設立されたか？③戦前の学校名は？（戦前創立の学校のみ記入）④創立記念日は何月何日か？⑤校史室の有無，の五項目であった。

アンケートは，153校から合計80部の調査票の回収ができ，回収率は52％だった。その回答を，文献資料[24)]，各学校の出版物，ホームページなどと照合したことによって，次のことが判明した。附録資料１に掲げたように，終戦時，現台北市の地域に官公立国民学校（旧台北州及び師範学校附属）は49校あった。そのうち，戦前の学校の校舎や校地を利用し，そのまま小学校という機能を継続しているものは46校である。おもに「内地」人児童が通った樺山国民学校と建成国民学校は，殆どの児童が日本の敗戦とともに，日本へ引き揚げたために廃校とされ，校舎は他の施設に転用された。やはり主に「内地」人児童が通っていた北投国民学校は，戦後初期，初級中学として改組され，現在，北投国民中学となっている[25)]。

現存する戦前創立の学校の中で，最も古いのは士林国民小学であり，1895年6月に設立された芝山巌学堂から数えて，すでに118年の歴史がある。最も歴史が浅いのは潭美国民小学と玉成国民小学で，1945年に創設され，2013年現在，68周年を迎えている。

校名は，戦後初期，国民党政府による日本色一掃運動のなかで，例えば，明治国民学校は双蓮国民学校へ，昭和国民学校は龍安国民学校へと変更されたが，かなり多くの学校は，校名をそのまま受け継いでいる。石牌国民学校，永楽国民学校，松山国民学校，蓬莱国民学校，太平国民学校，士林国民学校などがその例である（植民地時代創設の46校のうち，16校は中華民

国政府に接収された後でも戦前と同じ校名を持つ)。士林国民小学の記念文集には戦前の1941年から戦後の1949年まで二つの時代に跨って同じ校旗を使用していたという記録が残っている[26]。終戦前後で同じ「国民学校」という名称が用いられたという歴史の偶然があったことも，植民地の記憶を存続させる場としての機能を強化したと考えられる。

一方，中等教育，師範教育，高等教育機関（私立学校と専修学校を除く）などの学校は附録資料2，附録資料3に示されているように，終戦時17校あった[27]。しかし，現存する学校は13校のみである。台湾大学のように戦前からの連続性が見られる例も多いが，廃校されたり，合併されたり，ほかの施設に転用されたりしたことが原因で，戦後の展開は小学校レベルの学校よりも複雑であった。

廃校や吸収合併により，姿が消えたのは台北州立台北第二高等女学校，台北州立台北第四高等女学校，台北州立台北第二商業学校，台北州立台北第四中学校の4校である[28]。校名変更については，台北州立台北第一中学校（主に「内地」人が通う），台北州立台北第二中学校（主に台湾人が通う）が興味深い。戦後初期，校名をめぐる二つの学校の争いはよく知られている。日本の敗戦とともに，第二中学校の生徒が台湾人主体の学校こそ第一中学校と称すべきだと主張し，その争いは門標を奪い合うことにまで発展していたが，最終的に政府の介入により，中華民国「建国成功」という意を込めて，それぞれ「建国」と「成功」が与えられたのである。1946年から「台湾省立台北建国中学」「台湾省立台北成功中学」となったのはそのような経緯であった[29]。

台北州立第一高等女学校と台北州立第三高等女学校の間にも同様の争いがあった。1945年にそれぞれ「台湾省立台北第一女子高級中学」「台湾省立台北第二女子高級中学」となったが，こちらは後者のみ1967年に改称して「台北市立中山女子高級中学」となった。

学校組織変更の例としては台北高等学校があげられる。『国立台湾師範大学校史』[30]によれば，台北高等学校は中華民国政府の接収により，1945年に「台湾省立台北高級中学」へと改組されたが，その後，1946年6月5日には別に「台湾省立師範学院」が設けられている。1949年に台北高級中学が廃校になると，台湾省立師範学院がそのキャンパスと校舎を使用し，現在は台湾師範大学となっている。

このような学校は台湾社会の到る所にあり，校名，学校組織が変わっても，人々を植民地の記憶の想起に向かわせる場であり続けた。戦後初期の台湾では学校にまつわる記憶を選別し，植民地時代の学校であったという事実は，国民党政府にとって忘却すべき対象とされたのだが，ほとんどが廃校とはされなかったため，学校としての機能を引継ぐことになり，今日に至るまで記憶の場として存続しているのである。

第２節　1980年代台湾大学創立記念日論争

台湾ではこの20年足らずの間に，「反日」「排日」に代わって，植民地時代の「遺産」を守ろうとする態度が支配的になった。その大きな転換は，1980年代にあった。80年代以降の台湾全体の社会的な変化を背景にして起こった台湾大学創立記念日をめぐる論争が，その大きな転換点となった。

1980年代以降，台湾人の日本に対する態度には大きな変化が見られる。すでに拙著で指摘しているように，1980年代以降，台湾本土化意識の台頭につれて，植民地時代を扱った台湾史研究が多くなされるようになった。台湾主体の意識化という課題が追求されると同時に，植民地支配の遺産をどう取り扱うか，という問題の解決も模索されていた[31)]。1983年に楊碧川が雑誌『生根』で発表した「後藤新平―台湾現代化的奠基者」は，日本植民地支配によって台湾社会の近代化の基盤が形成されたという認識を示したものである[32)]。それは在日学者であった戴国煇の反論を招いたが，同じ時期，台湾では台湾大学創立記念日をめぐる論争も展開されていた。

論争の経緯については尹章義の著書[33)]で取り上げられている。尹によれば，1984年11月5日の『自立晩報』に掲載された「台大校慶生辰不符，校友咸盼験明正身」という短い記事が議論の原因となった。全文は以下の通りである。

> 台中市台湾大学学友会の王新徳，張子源，石文傑など23人が台湾大学校長の孫震へ差し出した意見書は，台湾大学の校慶日を1928年4月30日に訂正することを決断すべきだと述べている。王新徳らは来年，台湾大学が57周年校慶を迎えるものと期待している。〔筆者訳〕

つまり，台中学友会のメンバーは戦前からの連続性を復活させようとしていた。彼らは台北帝国大学時代の歴史を重視し，開校記念日は1928年4月30日，創立は57周年になると主張したのである。しかし，連続性を取り戻そうとする台中学友会の行動は，論争を招き，さらに対立を引き起こした。同年11月17日の『自立晩報』に台湾大学外文系教授らの次のような反論が掲載された。

> 台北帝国大学の創立は中華民族の恥辱であり，我々は毎年国の恥辱を祝う必要があるのか？台北帝国大学はすでに存在しておらず，復活することも永遠にできない。今，存在しているのは中華民国国立台湾大学で，少数の外国籍を除き，校長も教師も学生もみな中国人である。この学校は中華民国の学校で，教育の対象も目的もみな日本と無関係であるのに，創立40周年というのはどこが間違っているのか？〔筆者訳〕

記事の内容は，植民地時代の「過去」が中華民族の恥辱だという認識を示し，国立台湾大学

は中華民国の学校で，日本と無関係だと強調している。当時の台湾大学は，中華民国政府の接収日の11月15日を校慶日に，創立年数を40年にしていた。創立40周年とは1945年11月15日に大学が誕生したという意味で，戦前からの連続性を否定しようとしていた。1980年代に入ると，それまで公然と議論を交わすことのできなかった台北帝国大学時代のことがこの論争によって華々しく社会の表面にあらわれ出たのである。論争の結果，1985年の40周年記念事業に引き続き，1987年に60周年記念事業が行われることになった。

第３節　争点から記憶される対象へ

こうして植民地の記憶が公開の場面で語られるようになると，1990年代を境に創立記念日と創立記念行事は，いずれも争点から記憶される対象へと移り変わった。では，その変化現象は実際にどれほどの広がりをもったのであろうか。

表1．現台北市内日本統治時期設立諸学校（私立学校，専修学校を除く）の校慶活動について

	旧台北州国民学校及び師範学校附属国民学校（附録資料 1）	中等学校と盲唖学校（附録資料 2）	師範教育，高等教育機関（附録資料 3）	合計
終戦時学校数	49 校	10 校	7 校	66 校
現存する学校数	小学校：46 校 中学校:1 校（北投国中）	7 校	6 校	60 校
廃止や吸収合併（生徒は編入）された学校	(1) 台北市樺山国民学校 (2) 台北市建成国民学校	(1) 台北州立台北第四中学校 (2) 台北州立台北第二高等女学校 (3) 台北州立台北第四高等女学校	(1) 台北州立台北第二商業学校	6 校
調査票の回収ができた学校	29 校	7 校	6 校	42 校
戦前の開校記念日を校慶日にしている学校	7 校	1 校（金華国中）	0 校	8 校
戦前の開校記念日以外の日を校慶日にしている学校	22 校	6 校	6 校	34 校
創立年数を戦前開校日から数える学校	24 校	6 校	5 校	35 校
創立年数をいつから数えるか，検討中の学校	1 校（平等国小）	0 校	0 校	1 校
創立年数を 1946 年から数える学校	4 校（国語実小，湖山国小，富安国小，東湖国小）	1 校（台湾師範大学附属中学）	1 校（台湾師範大学）	6 校
備　考	学校を一つの単位として集計したため，台湾大学医学院は表から除かれている。台湾大学医学院は大学と別に院慶日を 4 月頃にし，2010 年 4 月 9 日に 113 周年院慶活動を行い，台湾総督府附属台北医院及び台湾総督府医学校時代からの連続性を強調。			

〈筆者作成〉

筆者は2010年6月頃にさらに，日本統治時期に設立された学校（現存の60校）のみを分析対象として二次調査を行った。調査方法は学校訪問や電話やe-mailのいずれを用いたが，調査項目はとくに①学校創立日，②校慶日，③校史室の有無，④最近の大きな創立記念行事とその挙行年月日についての状況を焦点にあてた。調査の結果（42校からアンケート回収）は主に表1のとおりである。なお，校史室の有無については文末の附録資料1，附録資料2，附録資料3に反映させた。

１．校慶は何月何日か

この調査によれば，校慶日の設定は，概ね六つに分類できる。すなわち，①戦前の開校日にしている場合（例えば士林国民小学，蓬莱国民小学），②戦後台湾行政長官公署が接収した日にしている場合（例えば台湾大学），③戦後の授業開始日にしている場合（例えば台北市立建国高級中学），④特別な日にしている場合（例えば台北市立成功高級中学），⑤戦後初期の教育部通達の影響で10月25日にしている場合（例えば現在の国立台北教育大学附設実験国民小学），⑥定めていない，の六つである。

①の校慶日を戦前の開校日にしている学校は，表1のように，現時点で8小中学校が確認できた。中でも，士林国民小学は，植民地時代開校以来，校慶日を変えたことがないと強調している。そのほか，金華国民中学，蓬莱国民小学，士東国民小学，大橋国民小学，興雅国民小学，老松国民小学，西門国民小学などが挙げられる。

次に②から⑥までの校慶日を戦前の開校日以外の日にしている学校は，表1のように34校が確認できた。中等教育以上の教育機関の場合は，戦後の接収日（②）又は授業開始日（③）を校慶日にしている例が殆どである。戦後，学校に勤める外省人教職員の比率が高かったため，その現象が助長されたと推測される。例えば，台湾大学は校慶日を戦後の接収日の11月15日にしている。台北市立建国高級中学は校慶日を戦後の授業開始日の12月6日にしている。

成功高級中学の方は鄭成功の台湾上陸の5月17日を校慶日にしており，④に該当する。1922年5月8日に設立された台北州立台北第二中学校に始まる成功高級中学は，戦後1946年に正式に授業が始まった3月1日を校慶日にしていたが，1950年に校慶日を鄭成功が台湾に上陸した日の5月17日に変更した。近年，同窓会のメンバーは校慶日を5月8日に戻そうと呼びかけているが，今のところ，実現していない。

光復節の10月25日を校慶日にした例は，現時点では，国立台北教育大学附設実験国民小学のみ確認ができた。第１節で述べたように，戦後しばらくの間，教育部からたびたび10月25日を共同校慶日にすると通達が発せられた。それにもかかわらず，10月25日を校慶日にしている学校は少ない。その理由について筆者はまだ明らかにできていない。

以上から，植民地時代に設立された台北市の学校には，校慶日を通して戦前とのつながりをより強固にしようとする志向性があまりみられない。校慶日を戦前の開校日にしていない理由

は先述したように，台湾でいう校慶日は必ずしも創立記念日に該当するものではなく，学校の存在そのものを祝うというような意味合いを持っている結果なのかも知れない。

２．○○周年はいつから数えるか

次に，創立記念行事で，学校の歴史がいつまで遡っているかに注目したい。

台北市では，表1のように戦前の開校日から創立周年を数え，連続性を強調する学校が35校あり，圧倒的に多い。これまで植民地時代に遡る創立記念行事を行わなかった学校も，1990年代以降，一転して記念事業を盛大に行うようになった[34)]。具体例を挙げると，台湾大学の80周年校慶（2008年11月12日），士林国民小学の110周年校慶（2005年6月1日），台北市立教育大学の114周年校慶（2009年12月25日），龍安国民小学の80周年校慶（2009年4月1日），老松国民小学の百十周年校慶（2006年5月6日），国立台北教育大学附設実験国民小学の百年周年校慶（2008年10月25日），成功高級中学の80年校慶（2002年5月18日）などがある。

それらの中では，台湾大学，国立台北教育大学附設実験国民小学，成功高級中学の事例が興味深い。台湾大学は先述した論争の直後の1985年に40周年の記念行事を行い，僅か三年後の1988年に60周年の記念行事を開催し，2008年には「創立80周年校慶」を開催した[35)]。しかし，異なる集団による記憶間の競合がなかったわけではなく，植民地時代記憶が高揚する中で，1998年に「創立70周年・改制53年」及び2005年に「創立77年・改制60周年」の記念行事を開催しており[36)]，植民地時代記憶をめぐる葛藤が現れている。そのような記憶の語り手による文化的ヘゲモニーの競合の経過にはかなりの紆余曲折がみられ，今後も調査を続ける必要があるが，大学の歴史を1928年までに遡ることは，既に定着している。

国立台北教育大学附設実験国民小学は，1945年以来十年ごとに『北小十年』（1955），『北小二十年』（1965），『北小三十年』（1975），『北小四十年』（1985），『北小五十年』（1995）の創立記念誌を発行していたが，1995年の50周年記念の後，2008年に一躍，百周年記念を祝っている[37)]。

成功高級中学にも同様な現象が見られ，創立八十周年記念誌『成功載揚』のなかの年表は「1989年に四十五周年校慶」，「1996年に七十五周年校慶」が記録されている。戦前からの連続性が「否定」から「肯定」へと変わったことは明らかである[38)]。

ただ，ごく少数だが，連続性を表明しない例も見られる。台湾師範大学は2008年6月5日に62周年校慶を行った。1946年から創立年数を数えるという点で，台湾大学と極めて対照的である。台北高等学校が帝国大学への予備教育的な機関であり，台湾師範大学が教員養成を主眼とした機関であるという機能の相違を考えれば，台湾師範大学は戦前の台北高等学校とは異なる校種であり，連続性を表明しえないことは当然といえそうである。

頻繁に創立記念行事を行うという現象は，台湾に特有のものではないが，台湾の場合には特有の盛り上がりがある。大多数の学校はその戦前の歴史を栄光のある過去として見なしており，華々しく挙行される創立記念行事は，戦前からの連続性を強調する場となっている例が殆どで

ある。それは簡潔にして純然たる顕彰というよりは，むしろ，起源の承認のようなものであり，学校史に「真の」過去が与えられた，という感覚であるように思われる。

第４節　校史室や記念碑や旧校舎などの記憶の装置

ここでは，記憶の装置としての校史室，記念碑，旧校舎などに注目したい。校史室，記念碑，旧校舎のいずれも植民地時代にまつわる様々な集合的記憶を映し出した一空間を構成している。

１．校史室の展示

校史室は，現在，ほとんどの学校で設置されている。台北市153小学校のうち，校史室設置が115校，設置中が6校，デジタル校史室が6校である（2010年，筆者が台北市教育局へ照会した回答による）。日本統治時期設立の学校（60校）では，附録資料1，附録資料2，附録資料3に示したように，校史室の大多数が1980年代以降に設置されたものである。そして，その設置数は1990年代以降も増加しつづけている。

設置数の増加は何故起こったのだろうか。そこには，政府の後押しも見ることが出来る[39]。ここでは次の3点を挙げておきたい。①国立教育資料館企画のデジタル化資料の展示サイト「百年老校校史専刊」開設，②台北市教育局の『跨越三世紀－台北百年老校追憶』[40] の出版，③吉林国民小学隣接の全台北市「百年老校の歴史追憶」資料館設置などがあげられる。台北市教育局による記念誌発行と資料館設置の動機は，『跨越三世紀－台北百年老校追憶』の序文に説明されている。

> ここ十数年，台北市内では沢山の学校が相次いで百年記念祭を開催した。校慶活動の催しが盛んに行われたことは各界の注目を集めた。そこで百年の歴史を持つ学校から提供して頂いた資料を保存・展示するため，教育史料典蔵館に「百年学校専区」を設置した。それはまた当局が百年老校物語を編集するきっかけでもあった。〔筆者訳〕

序文の説明は，市政府のこの一連の動きが，百年記念行事を盛んに行う時代風潮に連動したものであったことを示している。「百年老校」には，中国大陸の歴史を持つ学校（例えば東呉大学）もあるが，植民地時代の歴史を持つ学校の方が圧倒的に多い。それ故，資料保存・編集の主な対象は植民地時代に設立された学校である。

展示内容もまた大きく変化している。2005年に設置された台湾大学校史館の日本語版パンフレットは次のように説明している[41]。

> （略）校史館は設立以来，そのような大学の歴史を物語る文物の保存を責務と考えてきました。例えば，

台北帝国大学創立時の総長幣原坦直筆の掛け軸，台北帝国大学時代の古い器具や測定器，台湾大学初期の職員識別証，台湾大学の教授の助言でできた初めての台湾製チェロなどが保存されています。

すなわち，台北帝国大学時代から現在までのものを丁寧に収集し，それを展示しているということである。同パンフレットには「写真で記憶を呼び起こす」「失われた記憶を取り戻し，ぼんやりとした足跡を追い求めるために口述歴史の訪問取材を始めた」という説明もある。台湾大学校史館は文献資料だけでなく，写真やエピソード，オーラルヒストリーなども発掘・採集し，薄れゆく過去の記憶を保持しようとしている。

台湾で最初の小学校である士林国民小学の校史室の担当者の経験は，展示品の内容変化があったことを示している。校史室の設置に携わっていた同校元教員・施孫錬[42]の回想によることだが，1973年校史室設置当時，学校創設者・伊澤修二と戦前末代校長・大仁田豊蔵の肖像写真を掛けようとしたとき，「『未だに日本人の教員を尊敬しているのか？　君の考えに問題がある。それを外しなさい』と同校の執行秘書に怒られた」ことがあったという。当時まだ植民地時代校長，教職員の肖像写真の展示はタブーであったのである。しかし，今や植民地時代の歴代校長の写真も戦後の校長の写真と共に飾られ，戦前の文物，教職員写真，校旗，校章，学校沿革，郷土読本，卒業証書などの展示は当たり前のような存在となっている。施孫錬は植民地時代の学校体験をもつ戦前世代で，筆者が同校を訪問した当時（2009年11月18日），すでに定年退職していた。校史室を案内してくれたのは校長・邱錦興であった。戦後世代である校長の話によれば，士林国民小学を訪れる参観者はとても多く，校史室の解説は日常茶飯事のことだという。あまり知らなかった同校の歴史も，長く校長として勤務し，植民地時代の過去をよく耳にする間に熟知し，いつの間にか自分も専門家として，校史室，記念碑設置の経緯，校史室の展示品について詳しく説明できるようになったということであった。植民地の記憶の語り手が戦前世代から戦後世代へと交替していることが興味深い。

台北市立建国高級中学（校史室の設置は2005年12月6日），台北市立成功高級中学（校史室の設置は2009年5月17日），及び国立台北教育大学附設実験国民小学（校史室の設置は2008年10月25日）も校史室を持ち，植民地時代のものを展示している。様々な展示品のなかで，学校沿革や学校風景の移り変わりのポスターが飾られているのは共通の特徴である。国立台北教育大学附設実験国民小学の校史室設置担当者は，校史室設置当初，展示につかえそうなものは三つの記念碑しかなかったが，多方面の努力によって今の規模に達しているという。古本屋で入手した「御真影」と「教育勅語」もあったが，まだ展示しておらず，今後展示することも考えているということで，今のレベルにとどめず，戦前のものをさらに発掘したいと，訪問した筆者に力説した。

なお，上記三校の校史室設置担当者は以下のような共通点を持つことにも触れておきたい。すなわち，①三人とも戦後世代の教職員である。②彼らは専科教員でありながら，校史室の設

置ないし展示の業務に携わっている。（建国高級中学・徐建国は公民科，成功高級中学・李継宗は国文科，台北教育大学附設実験国民小学･郭志宏は，コンピューター関係の授業を受け持っている。）③学校史について興味を持ち，植民地時代のものを大切にしたいということで校史室の設置や展示に力を入れている。

他方，戦前の台北高等学校との連続性をうたわない台湾師範大学は，現在二つの校史室を持ち，戦前と戦後，それぞれ個別の歴史を反映することとなっている。戦前と戦後の非連続がはっきりと表明されているが，戦前主体の校史室では台北高等学校時代の記憶が大切に扱われているという印象を，訪問した筆者は受けた。校史室の設置，展示内容の選別に携わっていたのは，同大学大学院台湾史研究科教員・蔡錦堂である。台北高等学校について研究している蔡は，台北高等学校卒業生の同窓会（蕉葉会）との親交も続けている[43]。展示品のなかでとくに印象的なものは，一部の卒業生（例えば蔣松輝，李登輝，王育徳，林茂生，移川丈児など）の写真ポスターである。彼らの生涯の略歴は勿論，台北高等学校入学試験の難しさも説明されている。なお，同校には校史室の訪問者に対して専門解説員が設けられていないにもかかわらず，図書館副館長兼校史経営組組長・郭美蘭が丁寧に対応し，解説を行っている。植民地の記憶の語り手として見なすことができる蔡も郭も戦後世代である。植民地の記憶の形成において戦後世代が機能していることは，台湾師範大学の事例からも確認される。

こうして，台湾における植民地時代の学校にまつわる記憶の再構成は，以上のような形で校史室という空間の変容をとおして進行している。かつて排除される対象であった植民地時代のものが復活しつつあるように思える。

２．記念碑，旧校舎

戦前の建築物は，植民地の記憶の維持・再構成・形成において，視覚表象という点で大きな役割を担っていると考えられる。勿論，旧校舎や記念碑が全く残されていない学校も多く，植民地の記憶を再現する構内の空間は学校によってバラツキが大きい。しかし，記念碑，旧校舎を文化遺産として大切に保存するのはどこの学校にも見られる動きである。破壊されなかった植民地時代の建築物の一部が，1982年5月18日に公布された文化資産保存法によって古蹟に指定され，残されたことによって保存の動きは促進されている。

校舎については，現在の老松国民小学の旧校舎，台湾大学の図書館，文学院棟，台北市立第一女子高級中学の旧校舎，台北市立建国高級中学の旧校舎などは「台北市定古蹟」に指定されている[44]。先述した戦前との断絶が見られる台湾師範大学においても台北高等学校時代の校舎を大切にし，元台北高等学校講堂は古蹟に指定され，同大学にとって重要なシンボルとなっている。

記念碑については，次のような例が見られる。士林国民小学では，「八芝蘭公学校」の学校名称の刻まれた古い門柱が構内の一角に飾られており（図1），それに倣って新たに設けられた

昔風の門柱（図2）もあり，それは玄関の表側に飾られている。さらに構内には「士林国小校園一百周年校史沿革記略」「国民教育発祥地」の碑が建てられている。それは後述する校友会の力により建てられたものである。

図1　士林国民小学の構内の古い門柱
撮影：20091110

図2　表玄関に設けられた新しい門柱

国立台北教育大学附設実験国民小学は，入り口の近くに「御大礼記念樹」「創立十周年」の記念碑が飾られている。台北第二師範学校第二附属公学校時代の創立十周年（1937年5月13日に建てられた）のときにつくられたものである。戦後しばらくの間，庭の階段の踏み台になっていたが，現在では学校にとって重要な文化遺産である。

台北市立教育大学は[45]，戦後，戦前の台北師範学校女子部から台湾省立台北女子師範学校に改められた際の初代の校長の下で「創立三十周年記念碑」の碑文が削り取られ，「創立六周年記念碑」に変えられた。その記念碑は，現在，元のように復元され，構内の一角に飾られている[46]。

台北市立第一女子高級中学は「正しく，強く，淑やかに」という古い校訓碑が飾られている。その経緯について，同校の校史は次のように説明している。「日本人学友が本校を訪れ，ずっと（この碑を）探し求めていたが，1995年に漸く伝達室の裏にあるガジュマルの木の張った根の絡み合った中から見付かった」[47]。1934年の創立30周年の時に建てられたこの碑は現在，戦後の校訓碑と同じ場所「緑園」に置かれ，今では復活した校訓ともいうべき扱いとなっている。戦前と戦後，二つの時代が並んで構内で展示され，歴史を物語っている。

３．同窓会によって蘇った記憶

植民地の記憶が演出されている構内の空間は様々な影響によって出来上がったと考えられる。先述した台北市立第一女子高級中学の例から分かるように，そこには同窓会の影響力が介在していた。以下に，旧・建成小学校と士林国民学校の同窓会の例をあげる。

台北市建成小学校同窓会「建成会」の例は示唆に富むものである。戦後，建成国民学校（前身は日本「内地」人が主に通う建成小学校。1941年から建成国民学校となった）は廃校となり，

校舎は台北市庁舎として使用されていた。建成国民学校という記憶が段々薄れてゆく中で，市政府が新しい庁舎へ移転したため，旧キャンパスと校舎は2001年から建成国民中学と台北当代芸術館が共同で利用することとなった。2001年5月28日に家族を含む約三百人の建成会メンバー達が建成国民中学を訪れ，新校舎転入の式典に参加した。彼らは大歓迎され，その後，記念誌『建成』に，訪問した彼らの感動・感激が，例えば「潘校長始め教職員と全校生徒が万雷の拍手と連爆竹を打ち上げて迎えてくれた」「母校を継いでくれている建成国中」という表現で収録されている[48)]。なお，この大会模様は，台湾現地の新聞，テレビで大きく報道され，日本ではNHKが翌日朝，全国向けのニュースの中で放映したことも特筆すべきである[49)]。こうしたメディアの報道がもたらす影響がさらに記憶への関心の高まりに拍車をかけている。言い換えれば，台湾社会は植民地の記憶を作り出すための社会的な条件が整っている状況にあり，そこから植民地時代の過去の記憶化がさらに進むと思われる。現在，建成国民中学校史室には，建成会から寄贈された教科書，制服，卒業名簿などが展示されている。植民地時代の建成国民学校と現在の建成国民中学とは全く別の学校組織だが，それにもかかわらず，戦前からの連続性が復活したかのように思える。

士林国民小学には，元日本人教師の会である「士林会」と，同校の同窓会である「校友会」がある。「士林会」は，士林国民学校の元教員・久住正司が1980年に日本在住の日本人教員に呼びかけて発起した会である。1983年に88周年を祝うため，第四回の大会を士林国民小学で行った。その後，日本人教師の台湾訪問に促されて，台湾人卒業生主体の「校友会」が1983年に結成された。「校友会」は戦前の開校日の6月1日前後を毎年大会の日にしており，戦前の記憶を持続させようとしている。そして，90周年を期に，「校友会」の企画と寄付金によって，1916年に建てられた「講堂」が修復され，現在の図書館「芝蘭書院」となった[50)]。「講堂」は士林国民小学に唯一残された戦前の建物であり，植民地の記憶の存続において重要な存在である。

二つの例には，植民地時代記憶の再編成の過程における同窓会の影響が，はっきりと見てとれる。そこに台湾人と日本人との連動も現れている。学校の空間のなかに根づく植民地の記憶は様々な集団によって集合的枠組みのなかで語られ，変貌しつつあることが明らかである。

第５節　考察

本稿では，学校，校史室を手掛かりに，台湾における植民地の記憶の変容を論じてきた。植民地時代に対する台湾人の新しいまなざしが1980年代の創立記念日論争から生まれ，そして，新しいまなざしが，1990年代の郷土教育，歴史教育と出会い，校史室を設置する現在の潮流が生まれたのである。

本稿で紹介したように，現台北市内には植民地時代創設の学校が60校ある。筆者の分析

ではそれらの学校の多くには創立記念行事の挙行，記念碑と旧校舎の保存，そして校史室の設置を通して戦前からの連続性を取り戻そうとする動きが見られ，その動きは植民地時代の「過去」「遺構」を自分たちの固有文化として共有しようとするものだと捉えられる。その点は，世界の多くの被植民地のように，植民者への批判に重点があり，植民地の記憶とは，悲惨な過去であったと考えられているのとは，大きく異なる。台湾の記憶ブームには独特の特徴があるといえよう。

そうした植民地時代をめぐる集合的記憶の表象は，数多くの社会的･政治的要因と絡み合い，また様々な記憶の選択と排除のうえに成立したものだと考えられる[51]。本稿で見てきたように，台湾においても植民地の記憶の取捨選択過程に，かなりの紆余曲折があったが，その理由の一つは，植民地時代が台湾を近代化した時代でもあれば，植民性を帯びた時代でもあったということにある。植民性と近代性との表象上の関係は極めて複雑である。校史室がまさしく人々の多様な記憶を織り上げる場として機能しているのは，実はその複雑性にあるのではないか。取捨選択の判断基準は，学校によって異なり，また，同じ学校においても必ずしも統一性があるわけではなく，多種多様な要因が関わっている。そうした詳細は学校の個別性にも関わるもので，稿を改めて分析することとし，本稿では，戦前からの連続性を求める点で多くの学校が共通しているということに注目してきた。

本稿で例証してきたように，1990年代以降，植民地時代に設立された学校の多くには，戦前からの連続性を取り戻そうとする動きが現れている。たとえ戦前との断絶があっても，何らかのつながりによってその戦前からの連続性を保とうとしている姿が見られる。そして，校史室の担当運営者は文献資料だけでなく，写真やエピソード，オーラルヒストリーなども続々と発掘・採集している。それは，薄れゆく過去の記憶を取り戻そうとしている動きだと解釈できるが，また同時に展示と参観者とが何れも記憶（展示品）の選別を行う操作の主体となっているということでもあると筆者は考えている。というのは，校史室の展示によって提示された視覚表象も一種の記憶の操作としての機能を持つものの，それに対して，参観する側も白紙状態で眺めているわけではないからである。そのような意味で，現在の学校における校史室，校舎，記念碑などは，まさに植民地時代の記憶を集約する場となっているといえる。本稿で明らかにしてきたように，廃校となったり，戦前との断絶があったりした学校においても，旧校舎の復元・再利用など何らかの形によって植民地時代の「過去」とのつながりが保たれている。そのように，植民地の記憶の集約，再生という指向性は，植民地時代に設けられた学校に関わって極めて強く存在しているのである。まさに国民党政府が抹消できなかった植民地の記憶を担っているといえよう。

一方で校史室，校舎，記念碑を中心に広がる植民地の記憶の地平を支えてきた代表的なものが，同窓会というネットワークであったと筆者は捉えている。植民地時代の教育を経験した多くの人たちは，民主化された時代を迎えるや，その経験を生かして校史室の設置・展示などに

携わるようになり，資料提供を行ったり，校史編纂に関わったりしたものも多く，それは台湾人に限らず，建成小学校同窓会のように日本人も含まれていた。次に，マスメディアの強い関心も挙げねばならないと筆者は捉えている。第４節で示唆したように，自らの過去，植民地時代の過去との繋がりを探求しようとしている多くの台湾人や日本人の活動やその心の動きを大衆紙などのマスメディアが報道し，そうした植民地の記憶に関わる動きを補完し，そして，今も引き続いて記憶ブームの社会的基盤を形成しているのである。

ここで一つ留意しておきたいのは，植民地体験を持たない戦後世代も記憶の再生作業を担っているということである。一般的にいえば，時間の経過にともない，記憶は風化と喪失に向かう。しかし，台湾の場合は，語り手の世代交替という現象が起きていると理解してよいと思われる。本論文で取り上げた校史室設置担当者もマスメディア関係者もその好例である。植民地経験を持たない彼らは，戦前世代から話を聞いたり，写真・文物を蒐集・展示したりして，積極的に植民地の記憶の再生作業に取り組んでおり，その過程で，次第に記憶の語り手にも成り代わっている。それ故，台湾における植民地の記憶は，戦前世代の間で共有化されているのにとどまらず，その実体化は戦後世代の継承と補完関係にあると捉えるべきである。記憶はそのまま継承された側面もあれば，変質していった側面もある。しかし，より重要なのは，学校にまつわる植民地の記憶が，校史室のさまざまな展示によって表現され，実体化されているということ，そして校史室が一つの装置として，植民地時代を経験した者にも，経験していない若い年代の人達にも，過去を語り合う可能性を提示していることである。台湾における植民地の記憶は，一つの世代に共有されるもののみならず，戦後世代へもかなり幅広く浸透してきているのが特徴である。

改めて，アルヴァックスの概念を借りて述べれば，植民地時代にまつわる集合的記憶は，個人個人の思い出や記憶が堆積してできあがるのではなく，様々な他者や集団，空間，物質との相互作用によって支えられ，構成されながら出来上がる。それは，個人の記憶が，むしろ集合的記憶によって規定されるということだが，台湾における植民地の記憶にも非常によく当てはまっている。もう少しその相互作用に注目すると，まず「過去」の出来事が想起されるか，何が想起されるかは，限定された集団や空間による集合的記憶に依拠するものであり，次に，その意味づけもまた集合的記憶に依拠するものになる。そしてその意味づけがまた別の「過去」の出来事の想起を促す。そのような相互作用の過程で，想起された「過去」の出来事はオリジナルなものを超越して，現在の集団に共有される「過去」となっているのである。

ただ，ここで強調しなければならないのは，筆者はそこに研究対象としての価値を見いだしているということである。なぜならば，台湾における1980年代末までの植民地経験の多くの叙述は，経験者の純粋な記憶ではなく，台湾の植民地体験を抹消するというある種の政治的傾向が反映されて生み出されたものだからである。したがって，今日の台湾の歴史研究においては，台湾人の植民地の記憶を探ることには特段の意味があり，本稿で筆者が論じてきたこともその

大きな流れの中にある。台湾の歴史研究の多くは，従来，文献を中心に，しかも文献の扱いにも偏りがある中で進められてきたが，1990年代になると，日本統治時代の台湾総督府の原文書の活用が進み始めた一方で，文献以外の図像，写真，遺物，オーラルヒストリーなどの方法による植民地の記憶の再生作業を伴うものが活発化してきた。本稿では，個々人の記憶という私的な営みの集積や，校史室の展示や校舎，記念碑などの物理的なものに焦点を当てて論じてきたが，やはり台湾の歴史研究の大きな動向の中にあるわけである。筆者は，今後さらに一歩進めて，台湾人と日本人のそれぞれの異なる様々な動きの相互作用を捉えなければならないと考えている。その相互作用の過程で，台湾社会において植民地時代の記憶が積極的に受容されるとともに，新たに台湾の土壌の中で生成されており，それがまた新たな歴史観を生み出しつつあるので，それを意識しながら集合的記憶を読み解いていくべきだと考えるのである。

ここで，本稿の冒頭で言及した1990年代の郷土教育を想起したい。当時の郷土教育の興隆には，校慶活動，校史室設置等と共時性と類似性が見られるが，以上のように考えれば，実は共時性と類似性は，偶然と捉えるべきものではないであろう。1990年代，植民地時代の「過去」についての台湾人の集合的記憶が形成されつつあった過程とは，実は「過去」が各地の台湾人に共通する郷土の一部だということの発見の過程でもあったということではないだろうか。植民地体験は，各地の台湾人の集団の集合的記憶となっており，そしてそれらが台湾全土にあまねく存在して，同じ台湾の文化に属するもの，という意識が，台湾全土に共有化されたのではないか。1990年代の郷土教育の興隆は，そのようなものであったのではないか。そして各学校の校慶活動，校史室設置等の活動もまた同様の動きの中で広く発生していた社会的現象ではなかったか。したがって，郷土教育の興隆と各学校の活動には類似性と共時性があったのではないか，と筆者は解釈している。アルヴァックスの言うように，どの記憶が代表性をどれだけ担うのかは，決定できるものではないが，どの記憶も代表性の一部を担っているともいえるのである。植民地時代の「過去」の個人的な体験の記憶は，郷土についても学校についても1990年代になって台湾人の集合的記憶に変容しつつあり，郷土教育も，各学校の校慶活動や校史室設置も，植民地時代の「過去」を自分たちの固有の文化として共有していこうとする台湾人の意識の現れであると思われる。

最後に，台湾の植民地の記憶の意味することを考えてみたい。ノラによれば「歴史は内部の意見の対立を抱え込んでいるにしても，まとまりがあり，主に学校を通じて共有化されるものだが，他方，様々な個別的記憶，すなわち歴史の語らざる経験は家族や特定の集団によって伝承される。それは身近な記憶なのである」[52)]。公的な場で植民地の記憶が語られ，広がっていくという台湾の事例は，語り手の減少によって記憶が葬り去られる可能性がないとはいえないものの，次世代への伝承に寄与し，歴史化につながっていく可能性も高い。なぜなら，学校という記憶の場が提示する視覚表象は，記憶の再生あるいは継承を強化し，歴史認識の再構築も促していくと考えられるからである。

植民地時代の歴史に対する台湾人の強い関心は，植民地時代に生まれた人々の記憶の語りによって引き起こされたものだと筆者は観察している。その点については今後の課題として更なる慎重な分析が必要ではあるが，学校という場に関して言えば，記念行事の挙行，旧校舎と記念碑の保存，校史室の設置などの動きには，一時的なもののみならず，歴史化していく側面も見られる。言い換えれば，「過去を語る」のみならず，「過去を書き留める」へと変化していくことも感じ取れる。

ここ二十年間の台湾の歴史教育内容の変容[53]，つまり，日本統治時代への評価の逆転は，こうした記憶ブームの高まりと密接に関連しているのではないか。かつての台湾には様々な個別的記憶が存在したが，今は学校，校史室，そして歴史教育という場を通してそれらが集約され，一つの集合的記憶になりつつあるように思える。歴史と記憶は，相互に刺激しあう二重の再生装置の様相を呈しており，台湾人アイデンティティを一つの方向に収斂させるようなかたちで，様々な影響を与えるのでないかと思われる。

附録資料1．現台北市における旧台北州国民学校及び師範学校附属国民学校49校とその現在

終戦時学校名	戦後初期の学校名	現在の学校名と校史室設置の有無	終戦時学校名	戦後初期の学校名	現在の学校名と校史室設置の有無
1 台北市川端国民学校	蛍橋国民学校	蛍橋国民小学（有）	32 士林国民学校	士林国民学校	士林国民小学（有）
2 台北市南門国民学校	台湾省警察学校	南門国民小学（無）	33 士林東国民学校	士東国民学校	士東国民小学（有）
3 台北市旭国民学校	東門国民学校	東門国民小学（未）	34 草山国民学校	草山国民学校	陽明山国民小学（有）
4 台北師範学校附属第三国民学校	台湾省国語推行委員会附設実験小学	国語実験国民小学（未）	35 社子国民学校	社子国民学校	社子国民小学（未）
5 台北師範学校附属第一国民学校	台湾省立台北女子師範学校附属小学	台北市立教育大学附設実験国民小学（有）	36 社子国民学校溪洲底分教場	富安国民学校	富安国民小学（無）
6 台北市明治国民学校	双蓮国民学校	双蓮国民小学（未）	37 草山国民学校坪頂分教場	平等国民学校	平等国民小学（有）
7 台北市蓬莱国民学校	蓬莱国民学校	蓬莱国民小学（有）	38 関渡国民学校	関渡国民学校	関渡国民小学（有）
8 台北市日新国民学校	日新国民学校	日新国民小学（有）	39 七星国民学校	北投国民学校	北投国民小学（有）
9 台北市太平国民学校	太平国民学校	太平国民小学（有）	40 石牌国民学校	石牌国民学校	石牌国民小学（有）
10 台北市永楽国民学校	永楽国民学校	永楽国民小学（有）	41 七星国民学校頂北投分教場	湖山国民学校	湖山国民小学（有）
11 台北市圓山国民学校	大同国民学校	大同国民小学（有）	42 内湖国民学校	内湖国民学校	内湖国民小学（有）
12 台北市大宮国民学校	大龍峒国民学校	大龍国民小学（有）	43 内湖国民学校東湖分教場	五分国民学校	東湖国民小学（有）
13 台北市河合国民学校	延平国民学校	延平国民小学（有）	44 内湖国民学校洲尾分教場	潭美国民学校	潭美国民小学（有）
14 台北市大橋国民学校	大橋国民学校	大橋国民小学（有）	45 南港国民学校	南港国民学校	南港国民小学（無）
15 台北市宮前国民学校	中山国民学校	中山国民小学（有）	46 南港国民学校後山坡分教場	南港国民学校 玉成分校	玉成国民小学（有）
16 台北市中園国民学校	中正国民学校	中正国民小学（無）	47 景尾国民学校	景美国民学校	景美国民小学（有）
17 台北市松山国民学校	松山国民学校	松山国民小学（有）	48 木柵国民学校	指南国民学校	木柵国民小学（有）
18 台北市若松国民学校	西松国民学校	西松国民小学（有）	49 北投国民学校	北投初級中学	北投国民中学（未）
19 台北師範学校附属第二国民学校	台湾省立台北師範学校附属小学	国立台北教育大学附設実験国民小学（有）			
20 台北市昭和国民学校	龍安国民学校	龍安国民小学（有）			
21 台北市幸国民学校	板橋国民学校	幸安国民小学（有）			
22 台北市富田国民学校	大安国民学校	大安国民小学（無）			
23 台北市末廣国民学校	福星国民学校	福星国民小学（有）			
24 台北市龍山国民学校	龍山国民学校	龍山国民小学（有）			
25 台北市寿国民学校	西門国民学校	西門国民小学（有）			
26 台北市堀江国民学校	双園国民学校	双園国民小学（有）			
27 台北市東園国民学校	東園国民学校	東園国民小学（有）			
28 台北市老松国民学校	老松国民学校	老松国民小学（有）			
29 台北市双葉国民学校	興雅国民学校	興雅国民小学（有）			
30 台北市樺山国民学校	1945 年に廃校。校舎の一部は 1970 年代撤去，一部は内政部警察署として使用，現在に至る。				
31 台北市建成国民学校	1945 年に廃校。1994 年まで校舎は台北市庁舎として使用。現在は建成国民中学と台北当代芸術館との共同使用。				

注１：終戦時学校に関しては『職員録』（1944 年 1 月 1 日発行）に基づいて整理したが，1945 年創立の南港国民学校後山坡分教場，内湖国民学校洲尾分教場及び戦後の変遷については筆者が 2009 年 12 月に行った予備調査の結果による。
注２：校史室の有無と設置時期に関しては筆者が行った予備調査（2009 年 12 月）と二次調査（2010 年 6 月頃）の結果による。
注３：（無）→校史室設置なし
（有）→校史室設置あり
（未）→未確認

〈筆者作成〉

附録資料2．現台北市内における植民地時代設立の師範学校，高等教育機関とその現在

終戦時学校名	現在の学校名	校史室の有無と設置時期
①台北帝国大学	国立台湾大学	あり（2005・6・22）
台北帝国大学附属医学専門部	国立台湾大学（医学院）	あり（2009・6）
②台北経済専門学校	国立台湾大学（管理学院）	未確認
③台北州立台北工業学校	国立台北科技大学	あり（1997 年）
④台北州立台北商業学校	国立台北商業技術学院	あり（不詳）
⑤台北州立台北第二商業学校	吸収合併／廃校	
⑥台北総督府台北師範学校 女子部（元第一師範）	台北市立教育大学	あり（不詳）
男子部（元第二師範）	国立台北教育大学	あり（1986・9・1）
⑦台北総督府台北高等学校	国立台湾師範大学	あり（1986・6・5）
備　　考	校史室に関しては筆者が行った二次調査（2010/6）の結果による。	

〈筆者作成〉

附録資料3．現台北市内における植民地時代設立の中等学校・盲唖学校とその現在

終戦時学校名	現在の学校名	校史室の有無と設置時期
①台北州立台北第一中学校	台北市立建国高級中学	あり（2005・12・6）
②台北州立台北第二中学校	台北市立成功高級中学	あり（2009・5・17）
③台北州立台北第三中学校	国立台湾師範大学附属高級中学	あり（2002・4・10）
④台北州立台北第四中学校	吸収合併／廃校	
⑤台北州立台北第一高等女学校	台北市立第一女子高級中学	あり（2003・12・12）
⑥台北州立台北第二高等女学校	吸収合併／廃校（終戦直後，校地，校舎は台湾省農林庁として利用。現在は立法院）	
⑦台北州立台北第三高等女学校	台北市立中山女子高級中学	あり（不詳）
⑧台北州立台北第四高等女学校	吸収合併／廃校（1947 年から，校地，校舎は省立台北高級医事職業学校として利用。現在は国立台北護理健康大学。）	
⑨台北市立家政女学校	台北市金華国民中学	あり（不詳）
⑩台北州立台北盲唖学校	台北市啓聡学校	あり（1987・11・27）
備　　考	校史室に関しては筆者が行った二次調査（2010/6）の結果による。	

〈筆者作成〉

1）ヴェレッド・ヴィニツキ-セルーシ（2010）「記念の本質」関沢まゆみ編『戦争記憶論―忘却，変容そして継承』昭和堂，43頁によれば「二〇世紀後半は，J.ウインターが名づけたように「記憶のブーム」の世紀として特徴づけられる。」

2）エヤル・ベン-アリ（2010）「戦争体験の社会的記憶と語り」関沢まゆみ編『戦争記憶論―忘却，変容そして継承』昭和堂，4頁

3）林初梅（2009）『「郷土」としての台湾―郷土教育の展開にみる台湾人アイデンティティの変容』東信堂，220頁

4）M･アルヴァックス著／小関藤一郎訳（2006）『集合的記憶』初版1989年，行路社，86－87頁。94頁にさらに「歴史は人類の普遍的記憶としての姿を現しているといえる。しかし普遍的記憶というものは存在しない。すべての集合的記憶は空間においても時間においても有限な集団に支えられている」と述べている。

5）前掲書，M・アルヴァックス著／小関藤一郎訳（2006），1-44頁

6）ノラによれば「記憶とは生命であり，生ける集団によって担われる。記憶は，たえず変化し，想起と忘却を繰り返す。（略）他方，歴史とは，つねに問題をはらみまた不完全ではあるが，もはや存在しないものの再構成である。」ピエール・ノラ著／長井伸仁訳（2002）「序論 記憶と歴史のはざまに」ピエール･ノラ編著／谷川稔監訳『記憶の場』第１部，岩波書店，31-32頁に詳しい。引用は長井の翻訳による。

7）前掲論文，ヴェレッド・ヴィニツキ-セルーシ（2010）42-56頁に詳しい。

8）アルヴァックスとノラによって提起された概念は，ポール・リクール著／久米博訳（2005）『記憶・歴史・忘却』新曜社，下巻158-180頁にもまとめられている。

9）黄智慧（2010）「台湾的日本観解析（1987－）」『思想』第14期，聯経，53-97頁に詳しい。

10）植民地時代からの連続性に注目する研究については少ないが，以下の論文がある。所澤潤（2000）「国立台湾大学医学院の成立と組織の継承―台北帝国大学医学部からの連続性を探る―」『東洋文化研究』第二号，学習院大学東洋文化研究所，243-288頁。五十嵐真子・三尾裕子編（2006）『戦後台湾における〈日本〉―植民地経験の連続・変貌・利用』風響社。

11）菅野敦志（2007）「1950年代台湾における文化的脱植民地化と「日本」」『現代中国』81号，日本現代中国学会，173-186頁に詳しい。

12）1945年11月17日公布「台湾省県市街道名称改正辦法」『台湾省行政長官公署公報』

13）日本語書籍，雑誌などを文化遺毒だと見なすことについては「1946年2月11日台湾省行政長官公署公告」『台湾省行政長官公署公報』（春）133頁を参照。

14）1951年台湾省政府公報四〇年秋字第五十七期，679頁

15）1953年台湾省政府公報四十二年春字第九期，87頁。1953年1月10日教四字第〇〇〇三二号台湾省政府教育庁令函（省立の各学校と各県市政府への通達）。

16）「台湾省政府教育庁令函」中華民国45年10月8日（45）教秘字第28875号。1956年台湾省政府公報冬字第八期，92頁を参照。

17）1971年1月22日教育部台（60）訓字第1893号令。「各校応剋期成立「校史室」」台北市教育局編（1983）『中等学校教育法令彙編』p.370及び1971年台湾省政府公報春字第三十六期，11頁を参照。

18）1971年3月10日教育部訓育委員会台（62）訓字第5573号函。「各級学校校史資料可自光復時起」前掲資料，台北市教育局編（1983）370頁を参照。

19）1973年8月27日教二字第〇五一九七号の台湾省政府教育庁函，1973年台湾省政府公報六二年秋字第六十五期，8頁

20）台湾省政府から公私立の各学校への通達，1987年8月18日教二字第六五七八四号の台湾省政府教育庁函を参照。

21）滕春興ほか（1987）『我愛台北―文物史蹟彙編』中華文化復興運動推行委員会台北市分会・台北市政府教育局，19頁

22）施孫錬（1987）『士林郷土教材専輯』士林国民小学，54-60頁

23）台北市教育入口網http://www.tp.edu.tw/neighbor/type/index.jsp?level=2（2010/04/09検索）を参照。

24）文献資料については，以下のものを参照した。台湾総督府編（1944）『職員録』昭和19年度，台湾時報，234-247頁，39-88頁。台北州内務部教育課（1935）『台北州学事一覧』昭和十年版，32-47頁

25）http://www.ptjh.tp.edu.tw/modules/tinyd/index.php?id=1（2010/10/1検索）を参照。

26）台北市士林区士林国民小学（1995）『九十年回顧　創校九十週年校慶専輯』，16頁

27）附録資料2と附録資料3の作成は汪知亭（1978）『台湾教育史料新編』台湾商務印書館，56-116頁によるところが大きい。

28）台北州立第四高等女学校の校舎は，1947年から省立台北高級医事職業学校（現在の国立台北護理健康大学）の校舎として利用され，現在に至っている。学校としての機能が続いているが，すでに廃校と見なされている。前掲書，汪知亭（1978）72頁及び国立台北護理健康大学ホームページhttp://www.ntcn.edu.tw/ntcnhist/3.htm（2010/10/15検索）を参照。

29）趙台生編（2008）『建中世紀』台北市立建国高級中学，34頁

30）国立台湾師範大学編（1985）『国立台湾師範大学校史』1993 年修訂版，1-17頁

31）前掲書，林初梅（2009），126-127頁

32）楊碧川（1994）『後藤新平伝』克寧出版社，180-208頁

33）尹章義（1986）「台大創校史与校慶」『台湾近代史論』自立晩報，111-140頁を参照。なお，前掲論文，所澤潤（2000）もこの論争に言及している。

34）若林正丈は台湾滞在日記という形で，1990年代学校創立記念行事の体験を記録している。若林正丈（1997）「台湾のあちこちで「百周年」始まる」『台湾の台湾語人・中国語人・日

本語人―台湾人の夢と現実』朝日新聞社，40-65頁 に詳しい。

35）『台大校友双月刊』第61期（2009年1月），http://www.alum.ntu.edu.tw/wordpress/?p=33（2011年1月23日検索）を参照。

36）「臺灣大學一甲子慶祝創校77年暨改制60週年繼往開來---尊重並維護文化傳統 開拓並創新知識格局」『台大校訊』第814期，2005年11月23日発行。http://host.cc.ntu.edu.tw/sec/schinfo/schinfo_asp/ShowContent.asp?num=814&sn=6254及び『台大校友電子報』http://host.cc.ntu.edu.tw/enews/ntuenews03.htm を参照。

37）陳藝文ほか（2008）『典蔵北小百年風華』国立台北教育大学附設実験国民小学，23頁，65-73頁

38）董其芸ほか（2002）『成功載揚』創立80周年校慶特刊，台北市立成功高級中学，22頁

39）呉清山「活化校史室，彰顕学校特色」『台北市教育e週報』2008年12月16日。

40）台北市立教育大学（2009）『跨越三世紀―台北百年老校追憶』台北市教育局。台北市立教育大学はじめ，中山女子高級中学，成淵中学，大龍国民小学など計19校の歴史が同書に収録されている。

41）「国立台湾大学校史館」パンフレット日本語版，15-16頁

42）施百錬（1995）『士林的故事―郷土教材（二）』士林国小校友会，54頁

43）蔡錦堂（2008）「台北高等学校に関する資料収集及びオーラルヒストリー」台湾社會の変容と口述歴史―思い出が紡ぎ出す歴史を探る国際研究集會，於東京女子大学

44）李乾朗（2001）『台北古蹟簡介』台北市文化局，244-249頁

45）同校は終戦直前，台湾総督府台北師範学校（女子部）であった。戦後まもなく，台湾省立台北女子師範学校へと改組された。前掲書，台北市立教育大学（2009）22頁に詳しい。

46）前掲書，台北市立教育大学（2009）13頁

47）前掲書，台北市立教育大学（2009）86頁

48）台北建成小同窓会･同学会（2001）台北合同大会記念誌『建成』台北建成小同窓会，23頁，70頁

49）当日（2001年5月28日）夕刊『自立晩報』及び翌日（2001年5月29日）朝刊『中国時報』,『聯合報』,『自由時報』によって報道された。

50）士林会と校友会については前掲書，台北市士林区士林国民小学（1995）120-123頁を参照。

51）森村敏己（2006）「歴史研究における視覚表象と集合的記憶」森村敏己編『視覚表象と集合的記憶―歴史・現在・戦争』旬報社，19-48頁に詳しい。

52）ピエール・ノラ著／工藤光一訳（2003）「コメモラシオンの時代」ピエール・ノラ編著／谷川稔監訳『記憶の場』第３部，岩波書店，463頁

53）歴史教育の変容については林初梅（2010）「台灣郷土教育思潮中的日本：郷土教材及教科書如何詮釋「日本統治下的台灣」？」『台湾学誌』第2期，台湾師範大学台湾文化及語言文学研究所，pp.107-125が詳しい。